

【ミニ特集】

---

「日本とケベックにおける先住民の文学・文化的対話」  
Dialogues littéraires et culturels entre les Autochtones  
au Québec et au Japon

---

趣旨と概要  
Introduction

小倉和子  
OGURA Kazuko

以下は、2023年10月7日に聖心女子大学で開催された日本ケベック学会全国大会シンポジウムの登壇者3名による口頭発表をもとに執筆した研究ノートである。

今回のテーマは「日本とケベックにおける先住民の文学・文化的対話」だったが、このようなシンポジウムが企画されたきっかけには、2冊の本の翻訳があった。

1冊目は今回の登壇者でもあるダニエル・シャルティエ (Daniel Chartier、ケベック大学モンレアル校教授) のマニフェスト的テキスト『北方の想像界とは何か? 倫理上の原則』である (シャルティエ、2019)。シャルティエは2019年春の来日の際に本学会でもケベック先住民の文学状況に関する講演を行ってくれたが、その来日に合わせて、今回のもう1人の登壇者である河野美奈子と小倉でこのテキストを日本語訳した。それが主張しているのは、これまで北方先住民の世界は長いあいだ西欧の芸術家や作家たちなどの外部の視線によって単純化されて表象されてきたが、じつはもっと複雑であり、先住民たち自身の内部からの視線によって見直される必要がある、ということだった。と同時に、地球上に住む先住民には共通の経験や課題も多いため、民族間の交流を深めていく必要性も説いていた。シャルティエが北方・冬・北極の想像界国際研究所を立ち上げ、このテキスト自体がすでに16の言語に翻訳されていることは、そうした先住民族間のネットワーク作りの一環でもある。

2冊目はアイヌ作家、土橋芳美の叙事詩『痛みのペンリウク — 囚われのア

イヌ人骨』である。シャルティエの前回の来日の際、われわれはジェフリー・ゲーマン (Jeffry Gayman、北海道大学教授) と知り合った。彼は、今回のシンポジウムの登壇者の1人でもあったが、アイヌをはじめとする先住民の教育について研究している。そのゲーマンの勧めにより、土橋の叙事詩のフランス語訳の話が持ち上がったのである。書名にもあるペンリウクは著者の曾祖父の兄にあたり、北海道日高の平取コタンの首長だった人である。彼は村の墓地に埋葬されてから30年後に掘り起こされ、他の1000体余りの遺骨とともに北大医学部の研究用「標本」となった。遺族による激しい抗議活動に屈した大学は遺骨の返還を始めるが、ペンリウクの遺骨は、返還予定日当日、「正確に特定できなくなった」との理由で返還を拒まれる。落胆する芳美に、あの世からペンリウクの声が、ときに怒りを露わにし、ときに優しく語りかけてくるのを書き留めたという体裁の作品である。シャルティエの尽力により、本学会のエティエンヌ・ローウ＝ジョバン会員 (Etienne Lehoux-Jobin、モンリアル大学大学院) によるフランス語訳 (Dobashi, 2023) が、2023年3月にケベック大学出版局から出版された。

このフランス語訳については、本学会ニュースレター2023年夏季号で河野が紹介し (河野, 2023)、『ケベック研究』15号にも小倉が書評を書いているので (小倉, 2023)、詳細はそちらをご覧いただきたいが、シンポジウムの内容とも関わるので少しだけ内容を紹介させていただくと、たとえば次のような一節を読むことができる。「その昔／アイヌ語ではなく／日本語を覚えよと／役人たちが言ってきたとき／イギリス人の／バチラーが／『言葉を失ってはなりません』／と熱く語ってくれたことを思い出す」(土橋, 2017, pp. 75-76)。バチラーというのは、アイヌ民族の支援に生涯を捧げた聖公会宣教師のジョン・バチラー (1854-1944) のことだが、彼はアイヌ語を学ぶためにペンリウクの家は何カ月も投宿していた。彼は明治政府のアイヌにたいする同化政策にたいして、言葉を失うことが自分たちの文化やアイデンティティの喪失につながることをよく理解していたのである。

以上2冊の本がきっかけとなり、日ケの先住民の文学・文化に関する本シンポジウムが企画された。ケベックの先住民と日本のアイヌ民族のあいだには、土地・言葉・文化の剥奪による同化政策など、多くの共通点がある。そもそもこれは、先住民に限ったことではなく、フランス系カナダ人自身が英国による支配下で、そして連邦政府の下で歴史的に経験してきたことでもある。さらに、現在世界で起こっている紛争や戦争も、結局のところ、土地・言葉・

文化の剥奪による自民族のアイデンティティの危機がその根底にあることが多い。そのような状況の中で、文学や芸術には何ができるのか？ その可能性を探るのが本シンポジウムの目的だった。

とはいえ、シンポジウムの主催者側も会場の大多数も、ケベックの先住民についても、アイヌ民族についても知識が十分ではなかったため、まず小倉がケベックを含むカナダの先住民とアイヌ民族について、次のような基本的な事柄を時系列的に整理することから始めた。以下の確認には、カナダ先住民については浅井（2004）や岸上（2009）などを、アイヌ民族については Clercq（2023）や中川（2022）などを参照した。

現在ケベックに住む先住民は11民族で約12万人<sup>1</sup>。中でも、もっともケベック社会とのつながりが強いのがイヌー（かつての名称はモンタニエ）で、約2万7000人の大半がケベック州の保留地内外に住んでいる（残りはラブラドル）。

イヌイットはケベック州最北端のヌナヴィクに住む者が多いが、ここは陸路の整備もなく、他の居住者が住む地域からは隔絶している。彼らはヌナヴト準州<sup>2</sup>に住むイヌイットとのつながりのほうが強い。

- 3万～1万年前、北米インディアン（ファースト・ネイションズ）がシベリアからベーリング海を渡ってカナダに到着。
- 1534年、J・カルティエがコート・ノール地方でイヌー（モンタニエ）に会ったと思われる<sup>3</sup>。
- 1603年夏、S・ド・シャンプランがイヌー（モンタニエ）の首長と会う<sup>4</sup>。
- 1759年、アブラム平原の戦いでフランスが英国に敗北。
- 1763年、パリ条約で、フランスは北米におけるほぼすべての植民地を英国に譲渡。その後、入植者と先住民の棲み分けのために保留地がつけられる（ただし、狩猟、漁労の権利は保持）。
- 1850年～、寄宿学校による同化政策。
- 1876年、最初の「インディアン法」（保留地の登録インディアンを連邦政府が管理し、言語、宗教の実践を禁止）。
- 1939年、イヌイットも連邦政府の管轄下に置かれる。
- 1951年、「インディアン法」改正（宗教の実践を容認）。
- 1970年代～、カナダ文学の中にアメリンディアン文学が出現（先住民文化活動活発化）。
- 1975年、ジェームズ湾・ケベック州北部協定。
- 1982年憲法（35条）に先住民の権利に関する記載。
- 1998年、連邦政府インディアン相ジェーン・スチュワートが寄宿学校について謝罪（「文化的大虐殺の犠牲者」）。
- 1999年、ヌナヴト準州（イヌイット自治政府）成立。
- 2008年、ハーバー連邦首相が寄宿学校について謝罪。

- 2000年代～、ケベック州において先住民文学への関心が高まる。
- 2021年、ブリティッシュコロンビア州やサスカチュワン州の寄宿学校跡地から大量の遺骨が発見され、虐待の実態が明るみに出る。
- 2022年、ローマ教皇がカナダを訪れ、寄宿学校について謝罪。

一方、アイヌ民族の祖先が北海道の地に到着したのも約3万年前といわれる。

- 15世紀、和人が北海道南部に進出。
- 17世紀初頭、松前藩がアイヌとの交易権を独占。
- その後、明治政府が蝦夷地の名称を「北海道」と改め、1872年、アイヌから土地を取り上げて、屯田兵制度により開拓を進める。
- 1877年、聖公会ジョン・パチェラーが函館に到着。1879年、平取へ移住。
- 1878年、自家用のサケ漁禁止。
- 1889年、道内のシカ猟禁止。
- 1899年、「北海道旧土人保護法」によりアイヌの農耕民化を図る。
- 1997年、「アイヌ文化振興法」制定。
- 2007年、国連が「先住民の権利宣言」採択。
- 2008年、「アイヌ民族を先住民とすることを求める決議」を国会で採択。
- 2019年、「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」（アイヌ新法＝アイヌ施策推進法）。
- 2020年、「国立アイヌ民族博物館」および「ウポポイ（民族共生象徴空間）」開設。

以上の確認のあと、登壇者からの報告に移った。最初の登壇者ダニエル・シャルティエは、残念ながら来日がかかわらず、録画での参加となったが、「ケベック先住民の文学的表象」と題する報告をおこなった。まず、伝統的に口承文学を基本としてきたケベックの先住民たちが、今世紀にはいつてから、文字を使用して自己表現をおこなうようになったことにより、一般読者を獲得し外に開かれるようになった現状に触れ、彼らを取り上げるテーマの中でも「領土性」の問題が中心的位置を占めることを指摘した。そして、ジャン＝フランソワ・レトルノー（Jean-François Létourneau）の著作を引用しながら、先住民文学における領土とはたんなる地理的空間ではなく、「文化を生み出す母胎」としての象徴的価値をもつものであること、また、その領土は「新世界」としてではなく、「アメリカらしさ」の概念に近づけて再考されるべきものであることを主張した。

次に、ジェフリー・ゲーマンが「世論を形成し、アイヌの状況を改善するための手段としてのアイヌ文学、アート、パフォーマンスの課題と可能性」について論じた。アイヌ民族もまた、とくに明治以降、北方開発や帝国日本の拡大に伴い、土地を奪われ、和人への同化を強いられてきた状況はカナダ

(ケベック)の先住民たちと酷似している。北米のように保留地 (réserves) がない分、和人の中に埋もれ、一見、和人と変わらない生活を送っているものの、教育水準や経済状況の面での格差は顕著である。しかしながら、近年、アイヌの「文化」を振興するための法律が制定され、状況は改善されつつあるように見える。同胞のエンパワーメントのために闘ってきた多くのアーティストたちの名前と活動を具体的に挙げながら、現状を覆す世論形成のために果たす文学・文化・芸術の役割が小さくないことを指摘する報告だった。

最後に、河野美奈子会員が『『北方の想像界』からみた『ヌーチミット』と『アイヌモシリ』』と題する報告をおこない、ジョゼフィーヌ・バコンやナオミ・フォンテーヌなどイヌーの作家たちが描く「ヌーチミット (内陸の土地)」と、アイヌ作家の土橋芳美が描く「アイヌモシリ (アイヌの土地)」を具体的に比較分析した。そして、これらの祖先の土地は作家たちが「書くこと」を通して戻るべき場所であり、祖先と対話し、その記憶をたどる過程は民族が受けた傷からの回復につながるのだと主張した。また、シャルティエの「北方の想像界」の概念を援用しつつ、異なる先住民民族どうしに共通する経験を抽出して単純化するのではなく、それらのあいだの差異に注意を払い、多彩さを認識していく必要があることを指摘した。

報告後、会場からは、日本とケベックにおける少数民族の言語の保存のための取り組み、とくに伝統的に口承だった文学作品の音の解析と保存、現代社会において先住民文化がクローズアップされることの意義、エスニックツーリズムの課題等について、多くの質問が寄せられ、活発な質疑応答がおこなわれた。

今回のシンポジウムは、大会の自由論題で発表した木下晴美会員の先住民アートとも重なる点が多かった。とりわけ、芸術における伝統の継承と現代性の問題、集団と個の問題、先住民であることを前面に出す作家・芸術家と、自らの創作活動において先住民であることにこだわらない作家・芸術家との関係等については、文化の可能性の問題とも絡み、さらに考察を深めていく必要がある。今後も機会を見つけて討論を継続していきたい。

(おぐら かずこ 立教大学)

## 注

- 1 カナダでは、北米インディアンの各民族 (「ファースト・ネイションズ」と呼ばれることが多い) とイヌイット、そしてこれらと白人との混血であるメティスを「先住民 (Autochtones)」と定義している。民族ごとの人口の最新調査についてはケベック州政府による以下のサイトを参照。数字は2022年末の時点による。

るものである。

<https://www.quebec.ca/gouvernement/portrait-quebec/premieres-nations-inuits/profil-des-nations/populations-autochtones-du-quebec>（最終閲覧日：2024年5月29日）

- 2 1993年にカナダ連邦政府とイヌイットのあいだに締結されたヌナヴト協定に基づいて、1999年にノースウエスト準州の一部を分割して設立されたイヌイットの自治が認められた準州。
- 3 Conseil des Innus de Pessamit, « Historique de Pessamit », <https://pessamit.org/historique-de-pessamit/>（最終閲覧日：2024年5月29日）
- 4 同上

### 参考文献

浅井晃（2004）『カナダ先住民の世界』彩流社。

CHARTIER, Daniel (2018) *Qu'est-ce que l'imaginaire du Nord ? Principes éthiques*, Arctic Arts Summit, Imaginaire | Nord.

シャルティエ、ダニエル著、小倉和子・河野美奈子訳（2019）『北方の想像界とは何か？理論上の原則』Arctic Arts Summit, Imaginaire | Nord.

CLERCQ, Luicien-Laurent (2023) « Chronologie historique, politique et littéraire du peuple aïnou », in Dobashi, 2023.

土橋芳美（2017）『痛みのペンリウクー囚われのアイヌ人骨』草風館。

DOBASHI, Yoshimi (2023) *Penriuk et sa douleur. Ossements aïnous retenus prisonniers*, traduit du japonais par Etienne Lehoux-Jobin. Presses de l'Université du Québec, coll. « Jardin de givre ».

岸上伸啓（2009）「第16章 先住民」小畑精和・竹中豊編著『ケベックを知るための54章』明石書店、119～126頁。

河野美奈子（2023）「〈寄稿〉『痛みのペンリウク：囚われのアイヌ人骨』フランス語訳出版に際して」『日本ケベック学会ニュースレター』第14巻第1号、3～5頁。

中川裕（2022）『100分de名著 知里幸恵 アイヌ神謡集』NHK出版。

小倉和子（2023）「〈書評〉土橋芳美著『痛みのペンリウクー囚われのアイヌ人骨』草風館、2017年」『ケベック研究』第15号、77～81頁。